

## 平成16年度 保育学科における授業研究の実施報告

松原勝敏

### Report of the open classes in the Department of Early Children Care and Education Katsutoshi Matsubara

#### Abstract

The purpose of this paper is to report the enforcement of an open classe started in the Department of Early Children Care and Education of Takamatsu Junior College. At the same time this paper aims at opening to the public as future study materials of the enforcement of the open class.

The main contents of this paper are summarizing the report of the enforcement of an open classe, the purpose and the contents of an open classe, and the results obtained by open class enforcement.

key words : An open class, lesson research

#### はじめに

平成15年度から、保育学科では教員の授業研究を開始した。ここでは、まず、前回の報告を引用しながら、この試みのねらいを示したい。

本学においては、学園の最大の受益者である学生のために、「学生のための大学づくり」を目指して改革に着手した。もちろん、大学改革の動きは数年前から本学においてもあったが、諸般の事情によって実効を伴うものとはなっていなかった。そこで、様々な議論の後に「春日の夜明け計画」（高松大学・高松短期大学再生のためのアクション・プログラム）がまとめられ、2002年11月14日の教授会においてその主要部分が承認された。

この計画は、「教職員一人一人がその職責を果たすことによって、仕事には厳しく、互いに高めあうことで磨かれる協働的人間関係を構築し、学生一人一人の心の満足度を可能な限り高める」ことを目標にし、「目標達成のための重点課題」の3つの柱の1つとして「(2)授業改善への飽くなき取り組み」を掲げた。これは、大学入学者の多様化によって、

大学では旧来の授業方法のままでは学生の学習の成立を達成することが難しくなっているにもかかわらず、大学の教員は、そうした状況に対応する教授法の獲得、学習支援のためのノウハウを身につける努力を怠ってきたとの認識に基づくものである。

しかしながら、大学全体としての授業研究の実施に至るまでには、本学にノウハウの蓄積がなく、教授会で「春日の夜明け計画」承認しておきながらも、実際に授業研究を実施するに当たっては、その実施を躊躇する多くの意見が聞かれた。

そこで、遅々として進まない議論を待っているはそれだけ改革が遅れてしまい、それによって学生への利益の還元も難しくなってしまうことは避けたいとの思いから、保育学科では、独自に授業研究を率先して行うとともに、他学科の牽引力となることを目指した。

本稿は、高松短期大学保育学科において平成15年度から開始された授業研究について、その実施とそれに関連する事業について、平成16年度の実施内容を記録として残すとともに、今後の研究資料として公開することを目的としている。

なお、本稿は、事業推進の責任者の立場から松原が執筆するが、本事業は、保育学科の全教員だけでなく、志を同じくする他学科及び大学に所属する教員、そして、支援して下さった事務職員全員による成果である。

また、本事業は、「大学教育高度化推進特別経費 平成16年度 教育・学習方法等改善支援経費」の補助によって実施された。

## 1. 平成16年度における授業研究の実施計画

本事業の平成16年度における事業の概要を「大学教育高度化推進特別経費 平成16年度教育・学習方法等改善支援経費」の申請書に従って記すと次の通りである。

### (1) 目的

保育学科に所属する教員が、それぞれに授業を公開し、定期的に研究授業・授業研究会を行うことによって、個々の教員の授業能力を高める。そして、教育・学習方法の改善を実現する。

### (2) 内容

大学は、個々の教員の独立性が高いが故に、教員相互の連携や協力関係が乏しいことが頻繁に指摘される。また、高等学校以下の諸学校の教員のように、教育の目的・内容・方法に関する知識と技能の習得を可能とする制度化された教員養成課程が存在しないために、大学においては授業能力に欠ける教員が多数存在するとの指摘が頻繁になされている。と

ところで、保育学科においては、保育士資格と幼稚園教諭免許状を同時に取得するために、多種多様な学科目の履修が求められる。それ故に、保育学科においては、それぞれに教員が授業を公開することによって、多種多様な授業方法の見学や分析を行う必要性を大いに有している。そこで、保育学科に所属するすべての教員が授業を公開し、定期的に研究授業・授業研究会を行うことを通して、保育学科の教育力を高め、教育・学習方法の改善を図る。

### (3) 計画

平成16年度においては、平成15年度の研究授業実践を踏まえて、研究授業のためのマニュアルを作成する。このために、定期的に研究授業・授業研究会を行いながら、優れた授業実践の記録・保存、分析等を行い、よりすぐれた授業実践のための資料の蓄積を行う。特に、これまでの講義中心の研究授業から脱却して、演習や実習など多様な授業形態における研究授業の可能性を研究する。

### (4) 期待される効果等

授業を公開することによって、個々の教員は、必然的に自らの授業を自己分析し、よりよい授業実践のための工夫を強いられることとなる。それゆえ、他の教員の授業実践における独創的な創意工夫をより意識的に見学・分析し、自らの授業実践に取り入れるようになる。また、教員が相互に授業実践の分析を行ない、他の教員の授業実践に対して自由に長所・短所を指摘しあえる雰囲気をつくることを通して、教員には、教授組織の一員としての意識が高まり、教員相互の連携・協力関係を構築することが可能となる。こうして、学生の学習意欲によりいっそう適切に応えることが可能となり、より密度の高い授業実践が可能となる。

平成16年度の計画については、前年度と同様に素案は松原がまとめ、学科会議での議論の後に文部科学省に申請するために大学当局に提出し、大学当局によるヒアリングを経て事業の学内での申請・採択を見た。法人：四国高松学園及び大学当局には、学園を取りまく諸条件が悪化する状況の中で、経費の支出をともなう事業についてその趣旨と保育学科の授業改善に対する願いを理解しての採択に、感謝する次第である。

## 2. 授業研究の実施

### (1) 研究授業担当者の決定

平成16年度は、保育学科に3名の新任教員を迎え入れることができた。3名ともに、大学における専任教員としての経験はなかったので、日々の授業の準備や大学の運営に関する多様な仕事に慣れることが先決であった。そこで、残る5名の中で既に研究授業を行った教員以外から担当者を決定した。

この決定に当たっては、慣れない職場において、自らが学生の時代に投影される学生のイメージとは大きく異なった学生を相手にして、日々工夫を重ねている新任の教員に対して1つの教員モデルを例示したいという松原の意図があった。そこで、新任の教員と年齢も近く、学生と非常に良好な人間関係を保ちつつ、学生を指導している田中助教授にお願いした次第である。

後期においては、講義形式の授業以外に授業研究を拡大する意図の下、池内教授に体育Ⅱの授業における研究授業をお願いした。また、本学創設当初から大学の発展に大きく寄与された井上教授にも研究授業をお願いした。

これら2名の教授に研究授業をお願いしたのは、長年の教員経験を活かし、学生や大学に対する思いを込めた授業実践を見学できるとの意図があった。

なお、これら3名の教員は、本学の教育実践の改善のために快く研究授業担当者を引き受けてくださったことを付言する。

### (2) 研究授業の実施

これら3名の教員による研究授業の実施は次の通りである。

第1回：平成16年6月28日(月)

研究授業実施担当者：田中美季

研究授業科目及び講義題目：保育内容—健康「子どもの発達と健康について(3)」

参観者8名（そのうち、併設の高松大学の教員2名）

第2回：平成16年11月25日(木)

研究授業実施担当者：池内裕二

研究授業科目：体育Ⅱ

参観者5名（そのうち、併設の高松大学の教員1名）

第3回：平成16年12月21日(火)

研究授業実施担当者：井上範子

研究授業科目及び講義題目：保育内容一言葉「ノンバーバルコミュニケーション」

参観者10名（そのうち、他学科の教員1名，併設の高松大学の教員2名）

### (3) 本学紀要への研究授業実施の報告

研究授業の結果及び検討会での参観教員の意見を参考にしながら，研究授業を担当した教員がそれぞれに自己省察を行い，授業研究の成果を以下の論文に纏め，授業改善の実践知の蓄積を図った。

また，授業研究実践の実施報告を次の通りにまとめた。

- ・松原勝敏「研究授業『保育原理 I B』の実施」『高松大学紀要』第42号，2004年9月。
- ・西浦和樹・松原勝敏「研究授業『発達心理学 I』の実施」『高松大学紀要』第42号，2004年9月。
- ・松原勝敏「保育学科における授業研究の実施とその背景」『高松大学紀要』第42号，2004年9月。
- ・田中美季「研究授業『保育内容—健康』の実施」『高松大学紀要第』43号，2005年2月。

## 3. 授業研究実施の成果

### (1) 本学における研究授業の実施可能性の確認

先にも記したように，「春日の夜明け計画」を教授会で承認したにもかかわらず，その後「専門が異なる授業を参観してもわからない」「授業形式が異なる授業を参観しても得るところは少ない」などとの意見が出されて，大学全体としての研究授業の実施をためらう傾向が当初は見られた。

しかしながら，平成16年度において実施した研究授業は，すべて内容の異なる演習形式の授業であった。もちろん，授業内容の細部にまで渡る検証は，専門が異なるが故に困難であるが，検討会では，授業の意図や授業の流れ，授業中の活動など多様な側面から，専門が異なる教員による意見交換が行われ，充実した検討会になったものと考えている。

### (2) 授業方法に関する学びあい

個々の教員は，それぞれが授業実践において，独自の工夫やアイデアを盛り込んでいる。

これら貴重な工夫やアイデアを個人だけのものにとどめておくことは、2つの意味で大きな損失である。

その1つは、せっかくの工夫やアイデアを特定の教員独自のものにとどめてしまっただけでは、他の教員の授業実践に刺激を与えることにならないということである。もう1つは、優れた工夫やアイデアであっても改善すべき点や主観的な側面がなにがしら含まれている点は否定できないであろうと思われるが、修正すべき点は他者の目が届かない教室内にとどまっていたのでは、授業者自身が気づきにくいものであるということである。

よって、研究授業を行うことは、大学全体の教育方法の改善に示唆をもたらすものであり、また、大学全体の教育力の向上につながるものとなる。

### (3) 学生指導に関する問題の共有化

特に、検討会においては、授業の意図や内容及び方法に関する議論だけでなく、授業実践構築の背景となる学生観や指導観、あるいは自らの教育観も述べながら意見交換が行われる。また、学生指導に関して日常的に悩みながらも解決のヒントを得ることができなかった課題を検討会を通して議論することも可能である。

### (4) 学生の多様な姿の客観的観察の可能性

講義形式の授業においては、若干の非積極的なそぶりを見せる学生が、演習形式の授業においては正反対の積極性を見せることはよくあることである。大学の場合は、高校までの学校とは大きく異なり、学生との接触時間が十分に保てないばかりか、個々の学生の名前すら教員が記憶できない場合は決して少なくない。

授業実践の構築においては、授業の目的や内容を十分に検討して方法が選択されるが、その際に十分に考慮しなければならないのは学習者の状態である。大学では、この点の配慮が伝統的に弱かったという面は否定できないであろう。

研究授業実践を通して、自分が授業を行っている教室では見せない姿を見せる学生の様子を見学することによって、学生の多様な面の理解が促進されるものと考えられる。

### (5) 教員による実践知の蓄積

研究授業を行うと、その実践を記録として本学紀要に掲載することをこの事業実施に当たって申し合わせている。紀要への掲載という作業を通して、個々の教員に教育実践への自己点検・評価がなされるとともに、実践知の蓄積によって大学全体の教育力向上につながると考える。

#### 4. 研究授業実施の課題

##### (1) 研究授業を継続的に実施するための具体策の検討

研究授業を実施している大学は、決して少なくはない。しかし、それらの大学が、研究授業実施に関して共通に抱える悩みは参加者の数である。保育学科では、学科全体の取組として実施しているので、参加者数を維持することができてはいるが「盛況」という数ではない。

また、保育学科の授業は、保育士資格と幼稚園教諭免許状を同時に取得するためにより過密な時間割となっており、特別な時間を設定して研究授業を実施するには至っていない。そこで、保育学科の教員であっても、自らの授業を休講にするわけにはいかないので研究授業に参加できないという場合もある。

授業実践の改善は、一朝一夕に実現するものではなく、長期的な努力の積み重ねによって実現されるものである。研究授業を継続的に実施するための具体策を早急に検討する必要がある。

##### (2) 研究授業実施のための研修の実現

本学においては研究授業実践の蓄積が無いことや研究授業に抵抗感を示す教員がいたことに加え、大学教員には、小・中・高等学校等のような養成課程が存在しないために、授業を見学する教員にとっても、授業のどこを見ていいのかわからないという声があった。また、平成17年3月に開催された自己点検・評価委員会でも研究授業実施の必要性に関する認識が保育学科以外からも出されはしたが、そもそも実施の方法がわからないので実現が困難であるとの意見が出された。

このような状況において、研究授業が必要だからと言って強引に押し進めることは決して得策ではなく、教員の意識変化を促しながら、主体的に全学的な授業研究の実現につなげる必要があると思われる。

そのための方法原理構築への示唆を保育学科の授業研究事業を通して得たいと考えている。

#### まとめに代えて

研究授業の実施に当たっては、事務局企画部をはじめ大学全体のご支援をいただいた。この場を借りてお礼申し上げますとともに、研究授業に協力して下さった学生の皆さんにも心から感謝したい。

なお、一言付け加えておかなければならないことは、2004年度に研究授業を行った3名の教員の日常的な多忙性である。研究授業を実施した順に述べれば、田中助教授の場合、日常の教育指導業務に加えて、併設の高松大学のサッカー部やハンドボール部の指導やサポートその他多様な職務をこなしている。池内教授の場合には、学生部長を務めており、学生に関連して生ずる様々な問題への対応に日々忙殺されている。そして、井上教授は、本学園の理事であるだけでなく、高松幼稚園の園長を兼任しており、その職務の量には膨大なものがある。このように、3名の教員は、その多忙性は誰もが認める状態にありながら、本学の教育力向上のために研究授業の担当を快諾して下さったことをここに記しておきたい。

#### 参考文献

- ・和光大学授業研究会『語りあい見せあい大学授業』大月書店、1996年。
- ・京都大学高等教育教授システム開発センター『開かれた大学授業をめざして』玉川大学出版部、1997年。
- ・伊藤秀子・大塚雄作『ガイドブック大学授業の改善』有斐閣選書、1999年。
- ・京都大学高等教育教授システム開発センター『大学授業のフィールドワーク』玉川大学出版部、2001年。
- ・京都大学高等教育教授システム開発センター『大学授業の参加観察プロジェクト(1)―大学授業の参加観察からFDへ―』京都大学高等教育叢書11、2001年。

\*本事業は、大学教育高度化推進特別経費 平成16年度 教育・学習方法等改善支援経費  
「保育学科における教員の授業研究の実施」によるプロジェクトである。

高松大学紀要  
第 44 号

平成17年 9月25日 印刷  
平成17年 9月28日 発行

編集発行 高松大学  
高松短期大学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841-3255  
FAX (087) 841-3064

印刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町1-8-10  
TEL (087) 833-5811